在日大学院留学生の日本語能力、勉学・研究に関する統計的研究
…指導教官を対象としたアンケート調査を中心として…

札幌学院大学　　金　明哲
国立国語研究所　　江川　清

1.　目的

新プログラム研究「国際社会における日本語についての総合的研究」の研究の一環として、急増している外国人留学生の言語状況を的確に把握し、今後の留学生の受け入れ、特に大学院留学生の受け入れの問題点や留学生の日本語能力と勉学・研究との関係などに関する問題点を明らかにするための調査研究を行っている。留学生の急増は、日本経済の国際的な進展と 1983 年の「21 世紀への留学生政策に関する提言」と翌年の「21 世紀への留学生の展開について」の二つの提言(今後二つの提言と呼ぶ)が大きなきっかけであるともいえよう。二つの提言を踏まえて、西暦 2,000 年には留学生が 10 万人に達するという留学生受け入れ計画が推進された。上記の二つの提言による 2000 年の留学生の数の想定では大学院生が 30,000 人 (公私立 10,000) 学部生が 40,000 人 (公私立 37,500)、高専・専修が 20,000 人である［1,2］。ちなみに、1997 年 1 月 24 日の文部省の調査によると、日本の大学などで学ぶ外国人留学生は、昨年 5 月 1 日現在で 52,921 人となり、前年に比べ 926（1.7%）減少した。その内訳を見ると、留学生全体に占める在学段階別の割合は、大学・短大が 47.2%で前年より 0.8 ポイント上昇、大学院も 37.4%と 2.8 ポイントアップした。

二つの提言では留学生の受け入れの意義について「わが国の大学などで学んだ帰国留学生が、わが国とそれぞれの母国との友好関係の発展強化のための重要な架け橋となることを考えると、21 世紀を望む日本にとって留学生政策は、その文教政策、対外政策の中心に据えてしかるべき重要国策の一つであるといっても過言でない。「我が国で学ぶ外国人留学生が、専攻する学問分野で学習成果をあげるとともに、日本についての理解を深めて帰国することが留学の重要な意義であり、日本語の修得はその基拠となるものである。日本語の修得のための条件整備は、その意味で留学生政策の根幹をなすものであり、海外における日本語の普及・教育体制の一層の整備拡充に努めつつ、留学生のニーズに応じた多彩な日本語教育体制を整備する必要がある。」と述べられている［1］。日本で学ぶ留学生が日本人学生と同じ教室・研究室で日本語による講義を受け単位を修得し、学習・研究成果をあげ、それぞれの母国との友好関係の発展強化のための重要な架け橋となるためには日本語は不可欠である。

日本は欧米と異なり、留学生の大量受け入れの実績があまりない。留学生の数が急増したのは最近のことであるため、留学生受け入れや留学生の日本語教育などに関する対応策が十分備えているとは言えない。最近、留学生受け入れの管理が強化され、多くの大学では学部留学生が入学する際には、日本語能力検定試験 1 級の成績を提出する必要がある。日本で日本人学生と同じ講義を受け、日本語による本・文献を読むためには、入学に際し勉強に必要最小限の日本語能力のチックが必要であることは言うまでもない。しかし、大学院に入学する際には、日本語検定試験 1 級のような日本語能力に関する成績を提出する必要がないのがほとんどである。また外国人留学生が大学院に入学する際の日本語能力試験は明確な基準がなく、大学により異なる。そこで本研究では各大学の大学院留学生の日本語入試試験の現状及び留学生の日本語の能力と勉学・研究との関係などについて調査分析を行い、今後の留学生の受け入れ及び留学生の日本語教育などにおける研究データを提供することを主な目的とする。

2.　調査の方法

本調査は北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の大学院留学生を受け入れている部分学部及び研究機関の教官を対象とした。

著者対象はランダムで学部・研究機関をサンプリングし、各分野別の留学生の比率にあわせ調整（再サンプリングする）を行った。

サンプリングされた学部・研究機関に所属する教官の数は合計 1864 人である。サンプリングされた学部・研究機関に対し、すべての教官にアンケート調査票の配布・回収に協力を求めた。その結果、依頼を受けてくれた機関に所属している教官は合計 1399 人である。1399 人を対象とし調査票を郵送し、618 部を回収した。回収率は約 44%である。

被調査者の分野別の割合は、理工系が全体の 79%（工学、理学、農学、歯学、医学、地球環境農学)、人文・社会系が全体の 21%（文学、国際文化、教育学、人間情報、人間環境、法学、経済学、比較社会文化）を占める。

調査票は、合計 12 問を設けているが、本稿では、留学生が入学する際の 1995 年現在の日本語試験の形式、指導教官と留学生との間に使用している言語、留学生の指導教官が現在の日本語試験に対する意識などに絞ったいくつかの問いに関する調査結果を述べる。

3.　調査結果

3.1　日本語能力の試験（入学試験）形式：

問．外国人留学生が大学院に入学する際の日本語能力試験の形式について教えてください。

1．日本語の筆記試験（語彙、読解、構文、語法）を行う。
2．日本語のヒアリング（聴解）試験を行う。
3．日本語口頭試験（面談を含む）を入試委員会など公の場で行う。
4．日本語能力の試験に関しては受け入れ指導教官に任せる。
5．日本語能力試験は日本語専門教官に協力してもらう。
6．　その他（　　）。

結果（単位は%）：

選択肢	1	2	3	4	5	6
全体	28.9	4.6	30.0	17.4	5.7	13.4
	17.3	4.2	28.7	31.2	3.2	15.4
理工系	25.7	3.3	29.6	21.6	4.5	15.2
	16.9	3.5	26.4	33.7	2.9	16.5
人文系	37.3	6.6	31.9	6.0	8.4	9.6
	18.6	6.4	36.4	22.9	4.3	11.4

上の行は修士課程への入学下の行は博士後期課程への入学時の日本語能力試験の形式に関する調査結果である。

修士課程への入学時の日本語試験は３番の形式が最も多く焼く 30%で、その次は 1 番、4 番の順で、それぞれ 29%、17%である。

博士の場合は修士とやや異なり 4 番の形式が最も多く 31%で、その次が 3 番、1 番の順で、それぞれ 29%、17%である。

上記の試験形式のなか、一つの形式をとっているのが修士の場合は約 68%、博士の場合は約 78%で、２つの形式をとっているのが修士の場合は約 27%、博士の場合は約 20%である。

複数の形式をとっている割合を下記する。

結果（単位は%）：

形式の数	1	2	3
全体	67.7	27.0	5.1
	78.0	19.8	2.2
理工系	72.9	23.0	4.1
	79.9	18.1	2.0
人文系	50.9	40.5	8.6
	70.9	26.2	2.9

3.2　使用言語状況：

3.2.1　日常会話について

問．受け入れている留学生との日常会話は何語を使用していますか。

1．日本語　2．英語　3．日本語と英語　4．他の言語

結果（単位は%）：

使用言語	1	2	3	4
全体	52.9	13.9	31.6	1.6
理工系	50.5	15.6	33.4	0.5
人文系	65.4	4.9	22.2	7.4

指導教官と留学生の間の日常会話では日本

語を用いるのが最も多く 50%以上を占め、人文系は理工系より 10 ポイント以上も高い。

英語と日本語をまぜて使っているのが約 30%に達している。

英語と日本語をまぜて会話を行う理由については「留学生の日本語力が不十分」が約 73%、「留学生の英語が不十分」が約 15%を占める。

英語だけを使用しているのは理工系は約 15.6%、人文系は約 4.9%を占める。

英語だけを使用している理由については「留学生の日本語が不十分」が最も多く、理工系は約 65%、人文系は約 75%を占め、その次は「留学生の英語が上手」（理工系 17.1%、人文系 25.1%）、「英語は国際公用語」(理工系 14.5%、人文系 0%)の順である。

3.2.2 個人指導について

問．留学生に対する個人指導に何語を使用していますか。

1．日本語　2．英語　3．日本語と英語　4．他の言語

結果(単位は%)：

使用言語	1	2	3	4
全体	50.4	16.4	32.1	1.6
理工系	46.5	19.0	24.0	0.5
人文系	69.6	3.8	22.8	3.8

個人指導の場合では理工系は約 47%、人文系は約 70%の指導教官が日本語だけを使用している。

日本語と英語をまぜて使用しているのは理工系は約 34%、人文系は 33%を占める。

日本語と英語をまぜて使用している理由については「留学生の日本語が不十分」が最も多く約 66%、「留学生の英語が不十分」が約 15%、「参考文献が英語」が約 13%を占める。

英語を使用しているのは理工系は約 19%、人文系は約 3%を占める。英語を使用している理由について「留学生の日本語が不十分」が約 60%以上を占め、その次が「留学生の英語が上手」が約 16%を占める。

3.2.3 講義・ゼミについて

問．留学生を含んだ講義(ゼミを含む)に何語を使用していますか。

1．日本語　2．英語　3．日本語と英語

結果(単位は%)：

使用言語	1	2	3
全体	68.1	2.7	29.1
理工系	65.6	3.3	31.1

講義・ゼミでは理工系は 66%、人文系は８０%が日本語だけを使用し、理工系では約 31%、人文系では約 20%が日本語と英語とをまぜて使用している。

日本語と英語をまぜて使用している理由については「留学生の日本語が不十分」がもっとも多く約 60%、「留学生の英語が不十分」が約 14%、「参考文献が英語」が約 14%占める。

今回の調査では人文系には英語による講義・ゼミはない。理工系は約 3%が英語で講義・ゼミを行っている。

英語だけを使用している理由については、「留学生の日本語の語学力が不十分」が 41.2%、「日本人学生に英語をマスターさせるため」が 29.5%、「英語は国際公用語で、読む人が多い」が 23.5%を占める。

3.2.4 学位論文について

問．学位論文は何語で書かせていますか。

1．日本語　2．英語　3．他の言語

結果（単位は%）

使用言語		1	2	3
全体	修士	49.3	50.1	0.6
	博士	39.8	60.2	0.0
理工系	修士	45.3	54.3	0.4
	博士	36.8	63.2	0.0
人文系	修士	66.7	31.7	1.6
	博士	64.7	35.3	0.0

学位論文は理工系の修士は 54%、博士は 63%が英語を使用しているのに対して、人文系の修士は 66.7%、博士は 64.7%が日本語を使用している。

英語の使用については修士の場合は約 30%、博士の場合は約 20%（理工系）が「留学生の日本語が不十分」を理由としている。

人文系の博士論文に関しては本調査では７人が英語で書いた。

問．英語を使用している理由

a．留学生の英語が上手。

b．留学生の日本語の語学が不十分。

c．英語は国際公用語で、読む人が多い。

d．研究内容を考慮すると英語が適切。

e．その他（　　）。

結果（単位は%）：

		a	b	c	d	e
全体	修士	12.6	32.2	33.6	16.4	5.1
	博士	13.6	20.5	41.9	19.0	5.0
理工系	修士	12.2	32.4	33.5	16.5	5.3
	博士	13.9	21.3	41.4	18.4	4.9
人文系	修士	15.4	30.8	34.6	15.4	3.8
	博士	7.1	7.1	50.0	28.6	7.1

以上の結果からわかるように、日常会話、個人指導、講義・ゼミでは半分以上が日本語を使用している.

えいごを使用することについては「留学生の日本語が不十分である」が主な理由であることがわかった。

ちなみに、「英語は国際公用語および英語で書いた重要文献が多い」の理由で英語を使用している教官が日常会話では１１人(1.8%)、個人指導では 17 人(2.8%)、講義では 4 人(0.6%)にすぎない。

以上のことから、日常会話、個人指導、講義・ゼミなどで 90%以上の教官が日本語を使用したいですが、留学生の日本語力の不十分などで英語を使用していることがわかる。

3.3　留学生の日本語能力に対する指導教官の満足度：

問．日本語の語学力について

a．不満足　b．やや満足　c．満足　d．非常に満足

結果(単位は%)：

１．書き能力：

満足度	a	b	c	d
全体	47.9	24.8	19.4	7.9
理工系	50.7	24.5	17.7	7.1
人文系	36.4	25.8	26.3	11.4

結果(単位は%)：

２．会話能力：

満足度	a	b	c	d
全体	25.8	33.7	29.3	11.2
理工系	28.3	34.3	27.1	10.3
人文系	15.1	31.1	38.8	15.1

留学生の日本語の書き能力に関しては理工系の指導教官の不満足度は人文・社会系の指導教官より高く、約半分が「不満足」している。全体からみても約半分の指導教官が留学生の書き能力に対して「不満足」している。

会話の能力に関しては、書き能力より不満足度が低く理工系では約 28%、人文社会系では約 15%の指導教官が留学生会話能力について「不満足」している。

3.4　日本語能力の試験に対する指導教官の意識：

問．今後留学生が大学院に入学する際の言語能力の評価について、ご意見を聞かせてください。

１．今のままでよい。

２．講義・研究に必要となる最小限の日本語能力を TOEFL のような試験)。

３．英語あるいは日本語のどちらかについて研究に必要となる最小限の言語能力を測るための試験を受けるべきである。

４．その他（　　）

結果(単位は%)：

選択肢	1	2	3	4
全体	21.3	34.5	37.3	6.9
理工系	20.7	31.0	40.7	7.6
人文系	23.7	48.3	23.7	4.2

上記回答の中、一つの選択肢を選択したのは理工系は約 94%、人文は約 97%である。

今回の調査から、約 80%の留学生の指導教官が、留学生の言語能力の入学試験に対して不満を持っていることや留学生の言語事情により、やむ得なく英語を使用しているケースが多いことが明らかにされた。

このような結果は今後の留学生を受け入れる際の日本語能力の試験などに関する有益な材料となると考える。

参考文献

[1]「**日本語教育の概観**」、**(社)日本語教育学会、**
1994 /10**.**
[2]「**学校基本調査報告書(高等教育機関)**」、
文部省、平成 5 **年度**。